

幸せの種をまく 福島の人が台湾の寄付金に感謝

(中央社記者東京 楊明珠特別寄稿)

日本福島の農業体験交流会の代理理事、半谷栄寿氏は「台湾佛光山からの支援は、福島南相馬市の子どもたちの成長を支援するために使うつもりです」と心から感謝の言葉を述べた。半谷氏の主催する南相馬市のソーラーアグリパークに初めて海外から送られた寄付金である。

311 東日本大震災から2年余りが過ぎた。東京佛光山寺の法師で、特定非営利活動法人国際 BLIA の積覚用理事及びほか8名が4月23日、東京から福島の南相馬市に赴いた。福島の様々な場所で満開の桜を見ることができたが、太平洋沿岸の津波の被害があった地域は、今なお瓦礫の残った状態であった。その途中、放射線量が高く居住者のいない飯舘村を通り、まだ雪が残っているのを偶然目にした。

以前東京電力に勤めていた半谷氏は、東電の福島第一原子力発電所で原発災害が発生したことに、内心とても自責の念にかられ償いをしたいと、南相馬市で津波が襲って荒れ果てた土地に、太陽光発電所と植物工場を作った。「南相馬ソーラー・アグリパーク」は、小中学生に太陽光発電の体験をしてもらうための日本で初めての先駆的な事業である。

積覚用理事は3月に中央社関連の報道を見た後、このような太陽光を使って発電する「青い田んぼ」や、放射線の心配のない植物工場の「緑の田んぼ」の概念がとても素晴らしいと感じ、見習い、少しでも力になることを希望したのである。

半谷氏は東京佛光山寺の一行に、311 大震災以後、台湾の人たちは福島だけでなく宮城や岩手県にも支援をし、今回も南相馬ソーラー・アグリパークの復興事業に特別な関心を持ってくれたことを心から感謝した。

半谷氏は、太陽光に植物工場を加えた独特の取り組みにより農業復興に協力でき、グリーンエネルギーが広げられると述べた。約2.4ヘクタールの農園に2つの植物工場があり、1年間に32万トンの野菜を生産する計画である。電力は隣の太陽光エネルギー発電所で約500kwを作り出し、余分な電力は売ることになっている。3月11日に蒔く種は5月8日頃に収穫し、第一陣の出荷となる。

半谷氏は、最も重要なことは人材の育成であり、人が成長してこそ震災復興がしっかりとできると述べている。そのため半谷氏は、そのほかに体験学習型の「グリーンアカデミー」を建設し、最初は小中学生が主な対象者であるが、将来的には高校生から大学生にまで広げ、グリーンエネルギーに対する理解を広めることにしている。

南相馬市は「避難指定区域」の11の市町村の中で人口が最も多く、5万人近

くいるが、311 東日本大震災以前の 7 万人には及ばない。半谷氏は「外部の人はこの人は皆引っ越して行ったと思っているが、それは間違った情報である」と述べている。

半谷氏の実家は南相馬市の小高区で、福島第一原子力発電所から 20 km 圏内にある。放射線量が高いことから小高区は 3 区に再編され、住民は住んでいないが行き来することは自由にできる。

311 東日本大震災以前には 500 余りの会社があったが、今では 40 しか残っていない。小高区にあった 4 ヶ所の小学校は、現在小高区の外に仮設校舎があるが、戻ってきた生徒の割合は 27% にも達していない。

半谷氏は、福島の子どもたちはあの未曾有の震災の経験から、今の感謝の気持ちを社会に還元する心を持つようになったと語った。子どもたちのそのような気持ちを力に変えるには、具体的かつ継続的な支援体制が必要である。したがって、継続的な台湾の支援体制にはとても感謝しており、またこれは南相馬ソーラー・アグリパークの国際交流の第一歩であると述べた。

